6月30日　ヨハネによる福音書4章43～54節

「驚くべきしるし」

聖書の中では、今日の個所のように奇跡のような出来事・驚くべきしるしが現れたからこそ信じた人たちのことが記されています。この出来事が起きたのは、かつて「カナの婚礼」の出来事において初めてイエス様が神様の力を示した場所でありました。このカナで、イエス様は二回目の奇跡を行っています。それが、「今にも死にそうな人が癒される」という、治癒の奇跡でありました。

今日の箇所は、自分の息子が病気になり、もうすぐにでも死んでしまいそうになっている、助けてほしい、そう訴えかける役人とイエス様のやり取りが中心になっています。ただ、そのように助けを求める役人に対して、イエス様は冷たく突き放すように「あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」と言葉を返します。しかし、これは単純にこの役人に対して突き放すための言葉ではなく、この言葉を後ろで聞いているガリラヤ人たち、「イエス様のしるしをエルサレムで見たから信じた」人たちに向けた言葉でありました。

「素晴らしい奇跡を見せてくれる」「私の病をいやしてくれる」「だから」信じた、という「条件付き」の信仰は、自分の思い通りにいかないことが起きるだけで、容易に「疑い」へと姿を変えてしまいます。そして、その奇跡が「自分のため」であればあるほど、私たちはその奇跡を起こすイエス様のことを「自分のための道具」のように思ってしまうのです。ここでイエス様が語った突き放すような言葉は、イエス様のことを信じたガリラヤの人々にも、しるしだけを根拠に信じてしまわないように、と釘をさすための言葉でもありました。

イエス様のことを信じたこの役人は、イエス様の奇跡によって信じたわけではありませんでした。彼自身は何も目撃することなく、しかしイエス様の「あなたの息子は生きている」という言葉を信じたからこそイエス様の言葉に従って家に戻りました。癒しを目撃して、自分にもご利益があると知って信じる表面的な信仰ではなく、この人の言葉は真実だと確信して至る、イエス様への本当の信仰がそこに示されていました。

このように、イエス様が行った奇跡のしるしは、その奇跡自体が神様の業であることも重要なのですが、最も重要なのは「イエス様の言葉が真実である」ことを示したことだと思います。そして私たちは奇跡を目撃しなくても、聖書の言葉によって、またこの地に教会が立てられているその事によって、確かにイエス様の言葉が真実であると知ることが出来ているのです。

私たちはイエス様に会ったこともなければ、多くの人が奇跡を目撃することなく信仰に入っています。「しるしや不思議な業を見なければ信じない」のではなく、イエス様がキリストである、救い主であると確信して、その言葉に従って信仰に至ることができています。そんな私たちのことを、イエス様は喜んでくれていると思います。

そしてそれは、私たちもまた「しるしや不思議な業」を行うことがなくても、誰かを教会に招くことができることを示しているのです。多くの人々にキリスト教の信仰を伝えるには、長い時間がかかるかもしれません。すでに日本にキリスト教が伝わって来てから、多くの時間が経っていながら、それでも未だに教会に来る人はごく少数にとどまっています。しかし、私たちがこの地で働きを続ける限り、信仰に生き続ける限り、この地での伝道は終わることがありません。神様の言葉がこの地で確かに現実になっている。その希望を胸に、今週一週間の歩みを、これからの歩みを共に進めていきましょう。

今日の説教箇所：ヨハネによる福音書４章43～54節

- 42:二日後、イエスはそこを出発して、ガリラヤへ行かれた。イエスご自身は、「預言者は、自分の故郷では敬われないものだ」と証言されたことがある。ガリラヤにお着きになると、ガリラヤの人たちはイエスを歓迎した。彼らも祭りに行ったので、その時エルサレムでイエスがなさったことをすべて、見ていたからである。イエスは、再びガリラヤのカナに行かれた。そこは、前にイエスが水をぶどう酒に変えられた所である。さて、カファルナウムに王の役人がいて、その息子が病気であった。この人は、イエスがユダヤからガリラヤに来られたと聞き、イエスのもとに行き、カファルナウムまで下って来て息子を癒やしてくださるように頼んだ。息子が死にかかっていたからである。イエスは役人に、「あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」と言われた。王の役人は、「主よ、子どもが死なないうちに、お出でください」と言った。イエスは言われた。「帰りなさい。あなたの息子は生きている。」その人は、イエスの言われた言葉を信じて帰って行った。ところが、下って行く途中、僕たちが迎えに来て、その子が生きていることを告げた。そこで、息子が良くなった時刻を尋ねると、僕たちは、「昨日の午後一時に熱が下がりました」と言った。それが、イエスが「あなたの息子は生きている」と言われたのと同じ時刻であったことを、父親は知った。そして、彼もその家族もこぞって信じた。これは、イエスがユダヤからガリラヤに来てなされた、第二のしるしである。